

調査白書

中小企業の 生成AI活用 実態白書

—— 個人の効率化から、チームの成果へ。



中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査

調査委託：TANKA Inc

制作日：2026年10月22日 | Ver1.2

回答者数 **500** 人

© 2026 TANKA Inc.

本書の視点・目次

AIの効果を、仕事の流れで捉える

個人の作業が速くなることと、チームの業務が早く完了すること。その両方から活用を見直す。

生成AIは、文章作成や資料整理など、個人が担う作業の時間を変えつつある。一方、仕事は一人で完結するとは限らない。返事を待つ、背景を説明する、過去の判断を探す。その時間が残れば、個人の改善がチームの成果に十分つながらないことも考えられる。

本書では500人の回答をもとに、個人とチームの効果、業務が滞る場面、共有・引き継ぎの実態を整理する。そのうえで、チームでAIを活かすための実践を提案する。

読む順序	内容	ページ
調査の全体像	主要発見・調査概要・回答者属性	03～05
第1章：効果	利用形態、個人とチーム、企業成果	06～10
第2章：業務の接点	待ち時間、情報探索、共有と属人化	11～16
第3章：期待と条件	活用の壁、経営の把握、次の需要	17～21
第4章：実践	チームAIの設計・導入・効果測定	22～27
調査を読むために	集計定義・限界／引用・権利・免責事項	28～29

主要発見

数字から見える、5つの論点

個人の改善に加え、チームの仕事をどう進めるかが次の論点となる。

64.2%

個人の作業が「速くなった」

チーム全体は51.8%。改善実感の割合に12.4ポイントの差。（Q2・Q4）

60.0%

個人とチームの速度差を実感

個人は速くなったが、チーム全体はあまり速くなっていないと感じる。（Q13）

44.0%

確認・説明・情報探索に1日1時間以上

個人作業の外側にも、日常的に時間を使っている。（Q7）

24.0%

生成AIの成果・情報を仕組みとして共有

たまに個人的に共有する40.6%とは、運用の状態が異なる。（Q9）

58.6%

担当者が不在になると止まる仕事が存在

「多くある」「いくつかある」の合計。継続性もチームの課題。（Q11）

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

Q2・Q4・Q7・Q9・Q11・Q13 | n=500 | 単一回答。

調査概要

本調査の対象と、読み取りの範囲

500人の回答を集計した調査であり、500社を単位とした企業調査ではない。

項目	概要
調査名	中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査
調査委託	TANKA Inc
利用プラットフォーム	Freeasy
回答者数	500人
調査期間	2026年10月16日～19日
集計対象	Freeasyの対象リスト「SMB_under100」からの回答
設問構成	Q1～Q19：選択式／Q20：任意の自由記述
集計基準日	2026年10月19日（集計結果出力日）

本書の読み方

「調査結果」は回答の集計、「考察」は結果の解釈、「実践提案」はTANKA Incの提案を示す。主観的な速度や時間の回答を、客観測定した生産性・売上効果と同一視しない。

回答者のプロフィール

業種・役職の異なる500人が回答

回答者の業種・役職は以下のとおり。日本の中小企業全体の構成を示すものではない。

役職（Q18）

単位：％

12.6	14.2	21.2	17.4	33.4
■ 経営者・役員	12.6% (63人)	■ 部長クラス	14.2% (71人)	
■ 課長・マネージャークラス	21.2% (106人)	■ 係長・主任・リーダークラス	17.4% (87人)	
■ 一般社員	33.4% (167人)	■ その他	1.2% (6人)	

業種（Q19）

製造	17.2% (86人)	建設・不動産	13.2% (66人)
IT・通信	13.8% (69人)	卸売・小売	15.6% (78人)
金融・保険	4.6% (23人)	運輸・物流	2.6% (13人)
医療・福祉	7.6% (38人)	教育	4.4% (22人)
士業・コンサルティング	3.0% (15人)	広告・メディア	0.8% (4人)
飲食・宿泊・サービス	4.8% (24人)	その他	12.4% (62人)

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

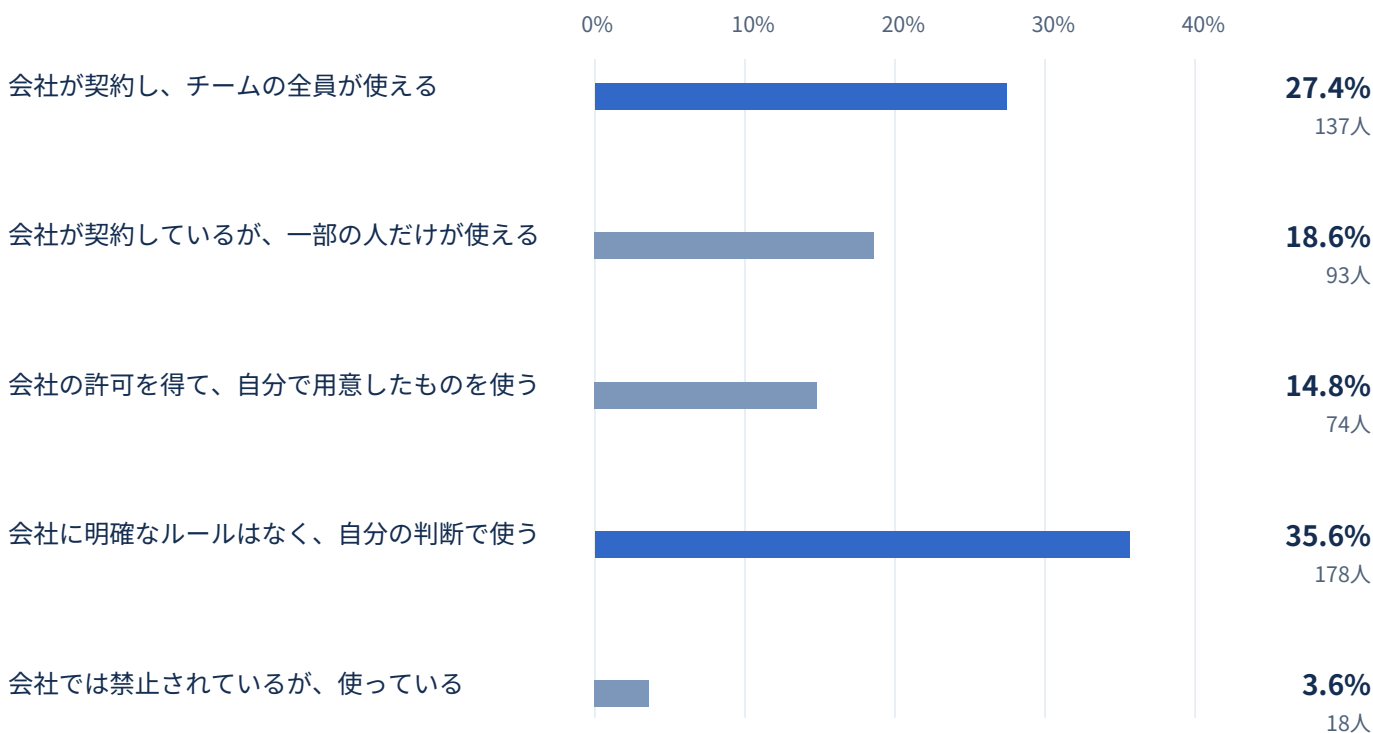
Q18・Q19 | n=500 | 単一回答。役職・業種は自己申告。

第1章 | 利用と効果

生成AIの契約・利用ルールには違いがある

会社契約の利用がある一方、明確なルールがないまま個人の判断で使う回答も35.6%。

Q1 仕事での生成AIは、どのような形で使っていますか。最も近いものを1つ。

**46.0%**

会社が契約している
2選択肢の合計：230人

39.2%

明確なルールなし・禁止下での利用
2選択肢の合計：196人

考察 | 利用可能な人、契約、ルールがそろっているかが、チーム運用を考える出発点となる。会社契約があることだけで、共有や成果の仕組みが整っているとは限らない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

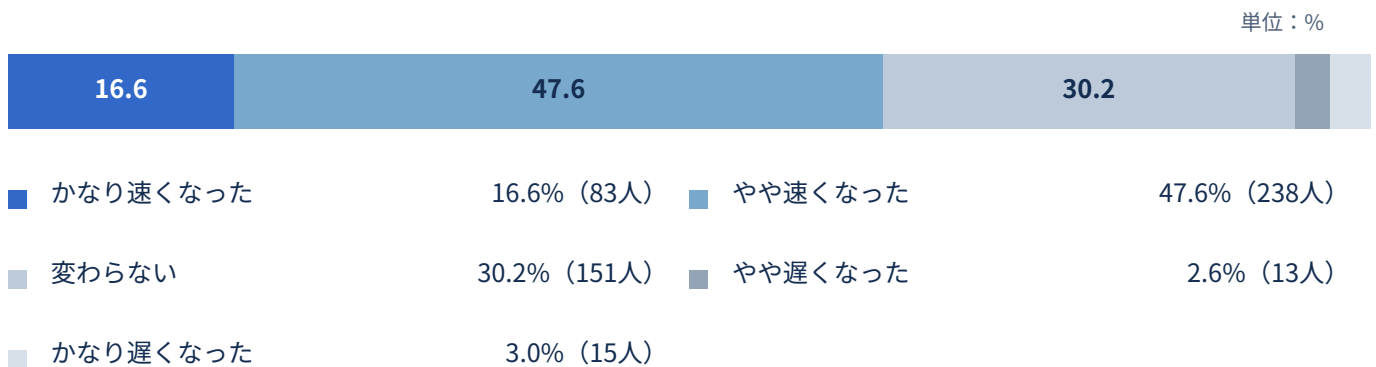
Q1 | n=500 | 単一回答。一部の選択肢は誌面上で短縮。個人で用意するものには無料版・個人契約を含む。

第1章 | 個人の効果

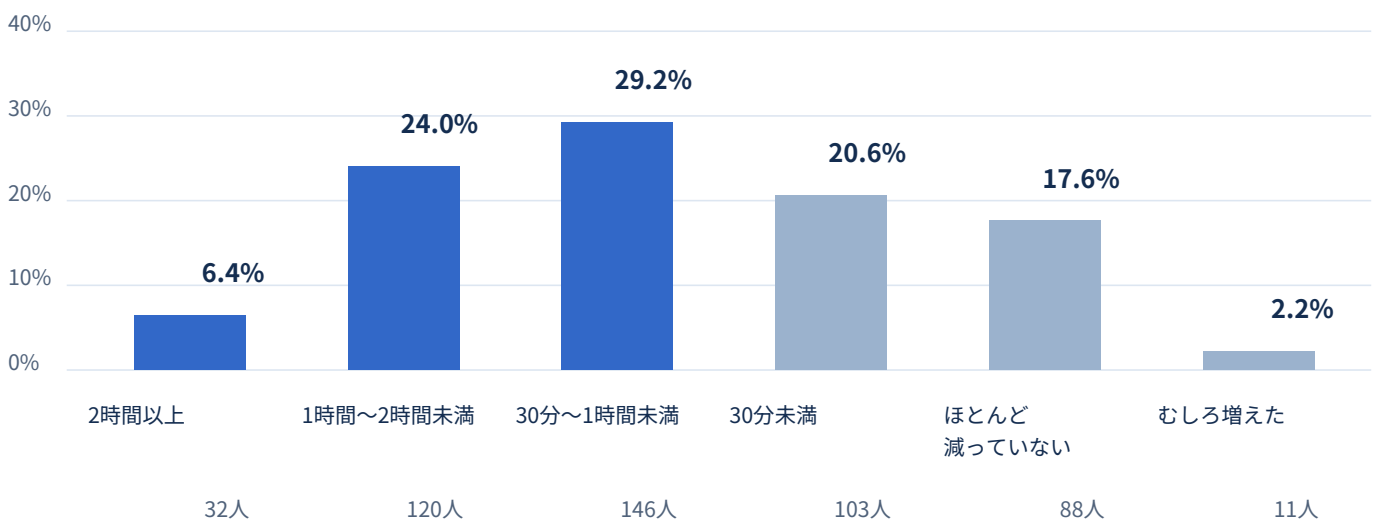
生成AIによる作業速度の向上と時間削減

64.2%が作業速度の改善を回答。1日30分以上の時間削減は59.6%。

作業速度の変化（Q2）



1日あたりの作業時間の削減（Q3）



考察 | 個人の成果や作業の背景を、次の担当者に渡せるかを検討したい。時間は区間回答のため、平均削減時間は算出していない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」
Q2・Q3 | n=500 | 単一回答。

第1章 | チームの効果

速度改善の実感は、個人とチームで異なる

個人64.2%、チーム51.8%が「速くなった」と回答。チームの改善も見られる一方、割合に差がある。

個人の作業（Q2）

単位：％



チーム全体の仕事（Q4）

単位：％



回答	個人（Q2）	チーム（Q4）
かなり速くなった	16.6%（83人）	9.8%（49人）
やや速くなった	47.6%（238人）	42.0%（210人）
変わらない	30.2%（151人）	38.8%（194人）
やや遅くなった	2.6%（13人）	3.6%（18人）
かなり遅くなった	3.0%（15人）	2.2%（11人）
わからない	選択肢なし	3.6%（18人）

考察 | 改善実感の割合の差は12.4ポイント。全回答者を母数とする2つの割合の比較であり、「個人だけ改善した人」の割合ではない。

出典：TANKA Inc「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」
Q2・Q4 | n=500 | 単一回答。

第1章 | 効果の受け止め

個人とチームの速度差を感じる回答は60.0%

個人とチームの速度改善の差について、回答者の実感を直接尋ねた。

Q13 「AIで自分の仕事は速くなったが、
チーム全体の仕事はあまり速くなっていない」と感じることはありますか。

60.0% 「とてもそう感じる」「ややそう感じる」の合計
300人／500人

単位：%



■ とてもそう感じる	12.4% (62人)
■ ややそう感じる	47.6% (238人)
■ あまり感じない	31.0% (155人)
■ 全く感じない	9.0% (45人)

考察 | 次に確かめたいのは、どの工程が変わらないか

個人とチームの速度改善に差を感じる回答が多いことは、業務を見直す手がかりとなる。ただし、特定の問題を示す設問への自己申告であり、実測した生産性の低下・停滞を示すものではない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

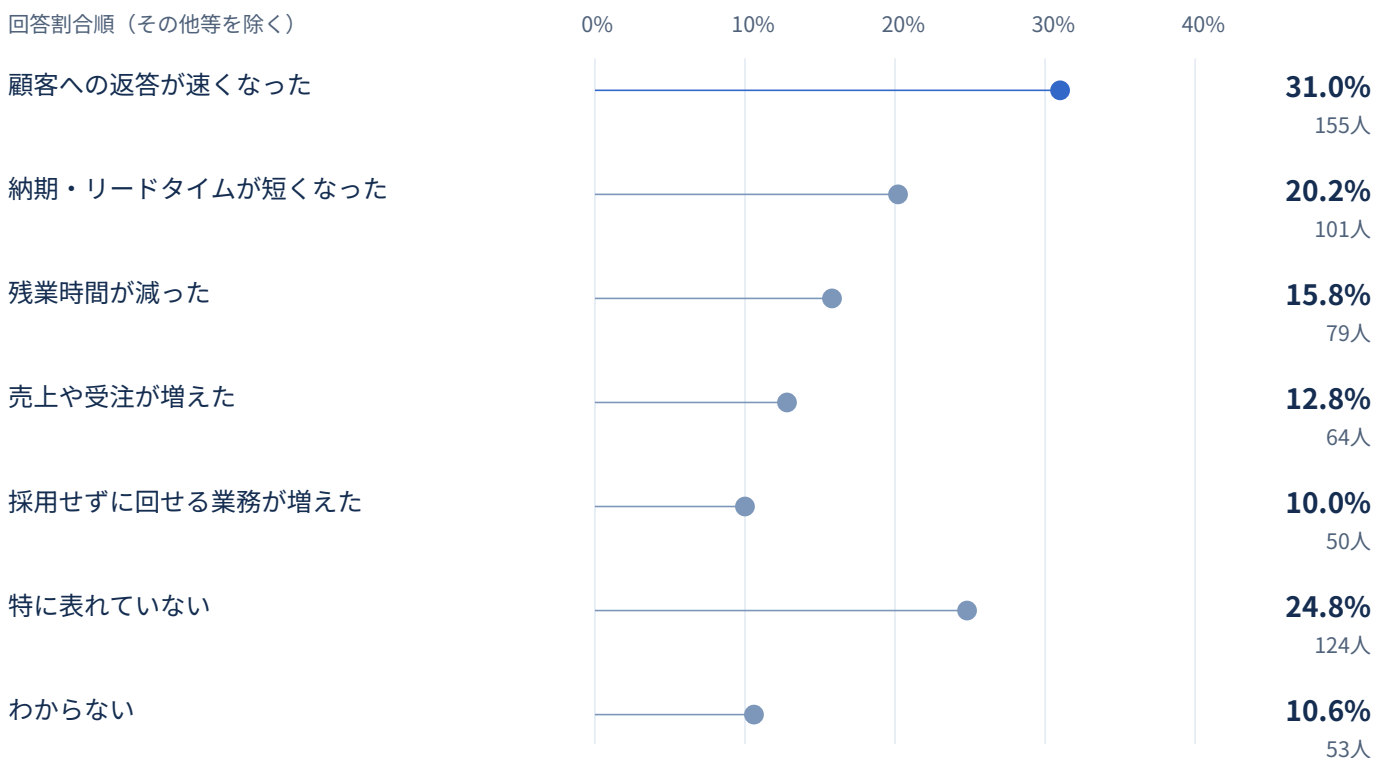
Q13 | n=500 | 単一回答。

第1章 | 企業成果

企業の成果は、どこに表れているか

最も多いのは「顧客への返答が速くなった」31.0%。成果の現れ方には違いがある。

Q5 生成AIの効果は、会社の「数字」に表れていますか。あてはまるものをすべて。

**考察 | 成果を一つの数字にまとめない**

顧客対応・納期・残業・売上は、それぞれ異なる成果である。「数字に表れた」という回答も、検証済みの会計・業務データとは限らない。自社では対象業務を定め、導入前後の実績で確かめたい。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

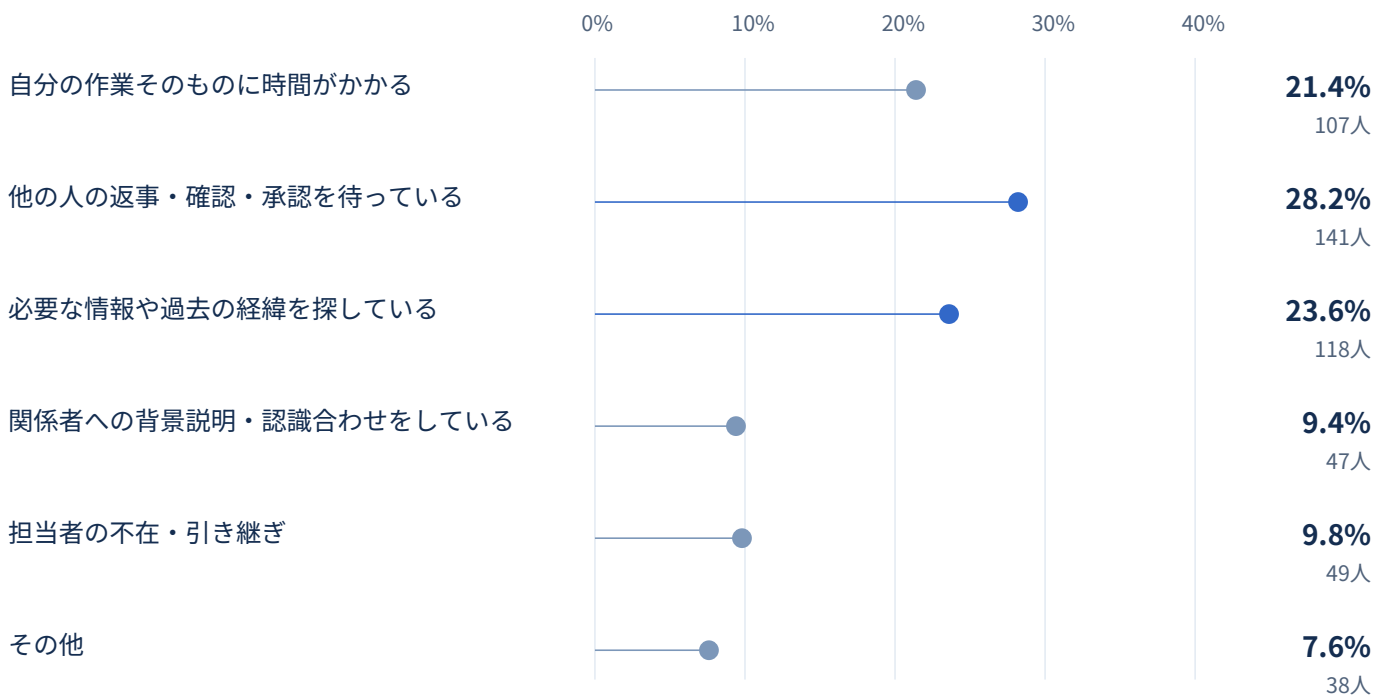
Q5 | n=500 | 複数回答（各項目の回答者割合）。

第2章 | 業務が滞る場所

業務の停滞では、確認待ちと情報探索が上位

最も多く選ばれたのは確認・承認待ち28.2%。情報・経緯の探索23.6%が続く。

Q6 仕事が止まったり遅れたりするとき、最も大きな原因は何ですか。

**71.0%**

待つ・探す・説明する・引き継ぐ
関連4選択肢の合計：355人（回答者の割合）

考察 | 作業の生成を速めるだけでなく、必要な判断材料をそろえ、担当者に渡し、次の行動につなぐ設計にも目を向ける余地がある。71.0%は原因の回答割合であり、時間の損失割合ではない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

Q6 | n=500 | 単一回答。合算対象：確認待ち・情報探索・背景説明・担当者不在。

第2章 | 確認・説明・探索

確認・説明・情報探索に、1日1時間以上が44.0%

確認や説明のすべてが無駄とは限らない。日々使っている時間を、回答区分ごとに見る。

Q7 1日のうち、同僚への確認、背景の説明（同じことを何度も確認・説明することを含む）、社内の情報や過去の経緯探しに使っている時間はどのくらいですか。

単位：%



44.0%

1日1時間以上
39人+181人=220人

考察 | 必要な対話と、減らせる反復を分ける

品質や合意形成に必要な対話を残しながら、同じ経緯の再説明や情報探索の繰り返しを減らせるかを検討したい。Q3の時間削減と差し引いて、純損失を算出することはできない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

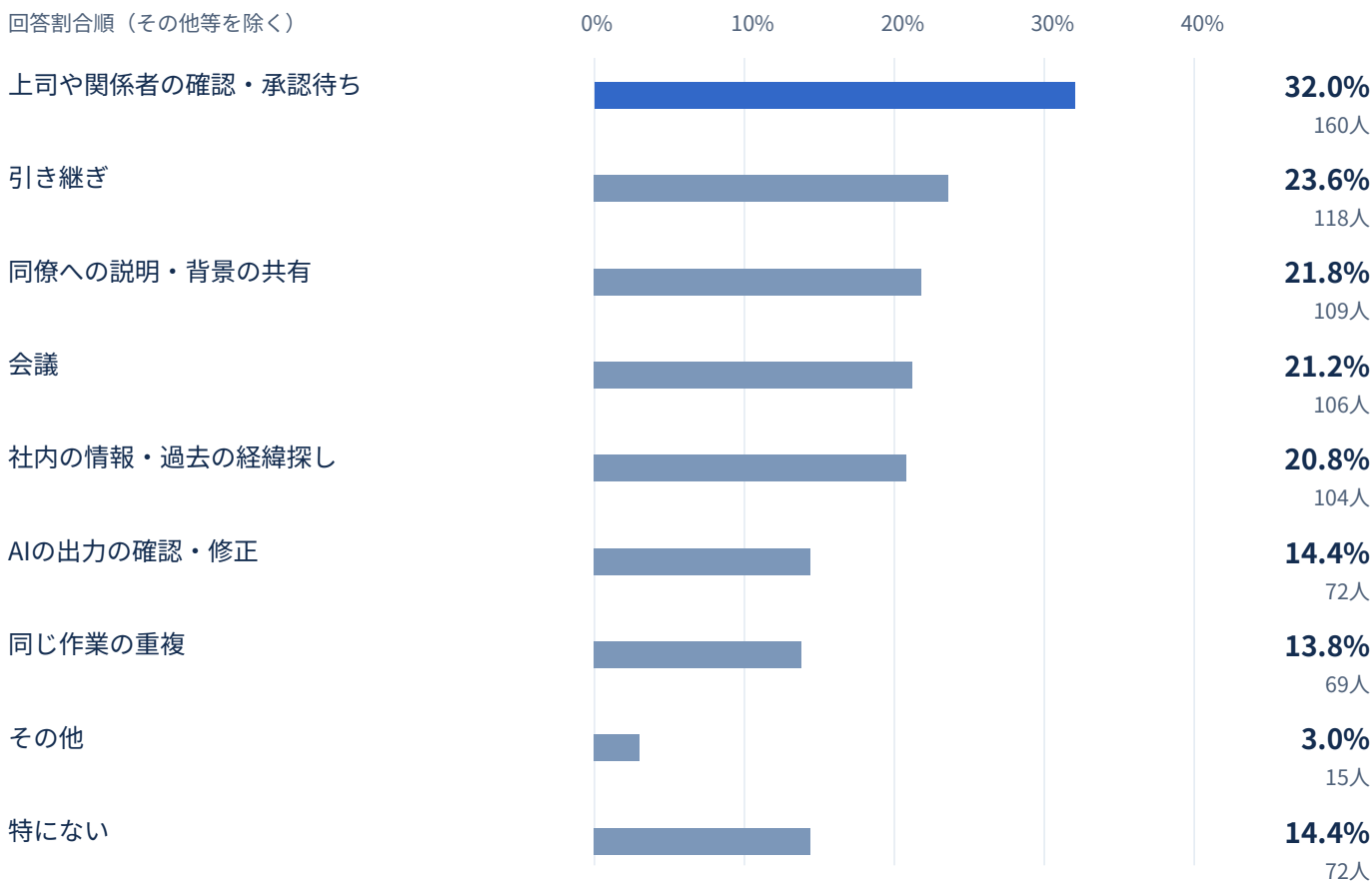
Q7 | n=500 | 単一回答。

第2章 | 残る負荷

AIを使っている、時間を取られる仕事

確認・承認待ちが32.0%で最多。引き継ぎ、説明・共有、会議も挙がる。

Q10 生成AIを使っている、まだ多くの時間を取られていると感じるものをすべて教えてください。

**考察 | 残る負荷を、業務ごとに観察する**

生成AIの出力確認・修正は14.4%。それと並行して、社内の確認待ちや引き継ぎも負荷として残る。導入検討では、作成作業・連携作業・出力検証を別々に洗い出すと、改善の対象が明確になる。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

Q10 | n=500 | 複数回答（各項目の回答者割合）。「同じ作業の重複」は、別々の人が同じことをしている状態。

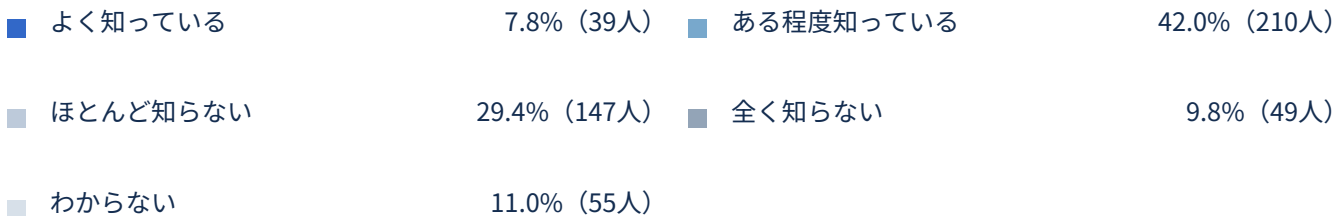
第2章 | AIが知る文脈

AIは、チームの事情を知っているか

利用中の生成AIが担当・案件の経緯・過去の決定を「知っている」との回答は49.8%。

Q8 あなたが使っている生成AIは、あなたのチームの事情（誰が何を担当しているか、案件の経緯、過去に決まったこと）をどの程度知っていると思いますか。

単位：%



整備する文脈の例	業務上の意味
担当と役割	誰に確認し、誰が判断するかを分ける
案件の経緯	現在の結論だけでなく、変更理由も追えるようにする
決定事項と未決事項	合意済みの事実と、まだ確認が必要な点を分ける

考察 | 「知っている」は回答者の受け止め方であり、実際の参照範囲・正確性・更新状況は別に確かめる必要がある。表は文脈整備の実践提案である。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」
Q8 | n=500 | 単一回答。

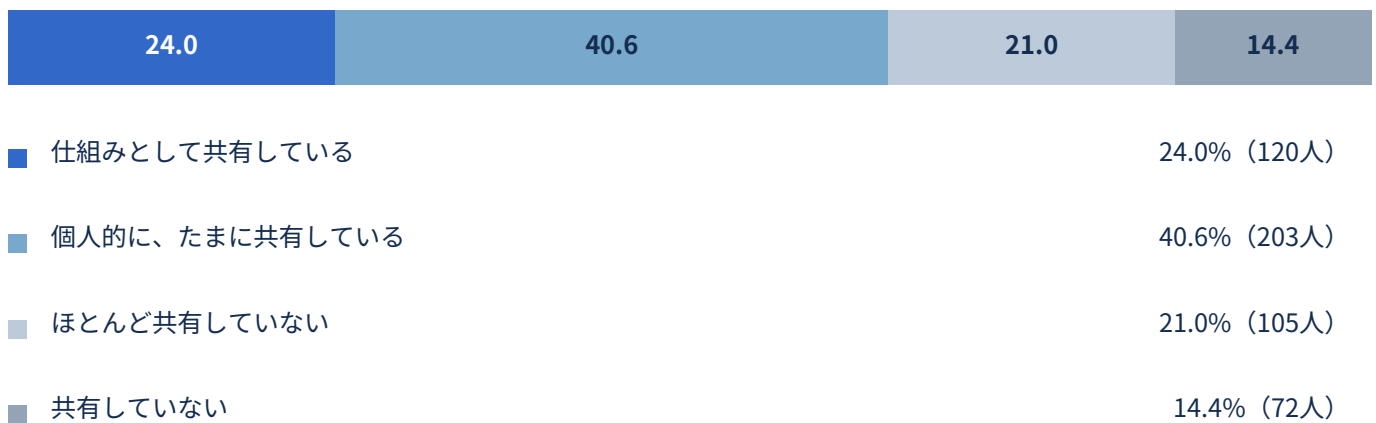
第2章 | 共有・再利用

共有は行われても、仕組み化は限定的

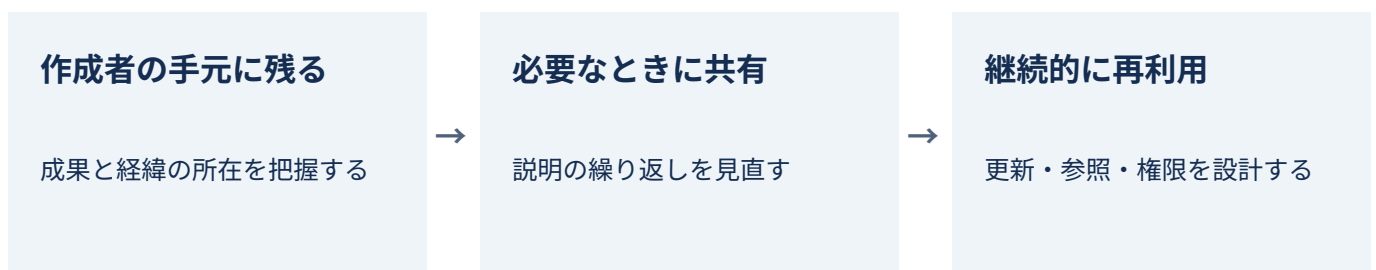
個人的にたまに共有する40.6%に対し、仕組みとして共有する回答は24.0%。

Q9 生成AIで作った資料や、AIに入力・整理した情報（経緯・決定事項など）を、チームで共有・再利用していますか。

単位：%



実践提案 | 再利用できる状態を整える



考察 | 共有先だけでなく、更新担当、参照権限、決定事項の記録まで整えることが重要となる。上の図は運用上の提案であり、調査で検証した成熟度モデルではない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

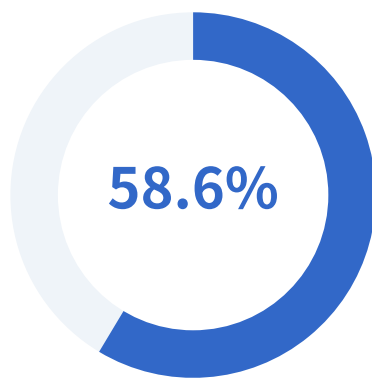
Q9 | n=500 | 単一回答。「仕組み」には共有フォルダ、テンプレート等を含む。

第2章 | 業務の継続性

担当者が不在でも、仕事は進むか

「休む・辞めると止まってしまう仕事」があるとの回答は58.6%。

Q11 あなたの会社には、「担当者が休む・辞めると止まってしまう仕事」がありますか。



「多くある」「いくつかある」の合計

293人／500人

残り41.4%は「ほとんどない」「全くない」「わからない」の合計（207人）。

回答内訳

多くある	13.0%（65人）
いくつかある	45.6%（228人）
ほとんどない	28.6%（143人）
全くない	6.4%（32人）
わからない	6.4%（32人）

考察 | 成果物とともに、判断の経緯を残す

引き継ぎには、未完了事項、連絡先、例外対応、過去の判断理由も関わる。情報を見つけられることと、人が責任を持って判断できることを合わせて設計したい。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

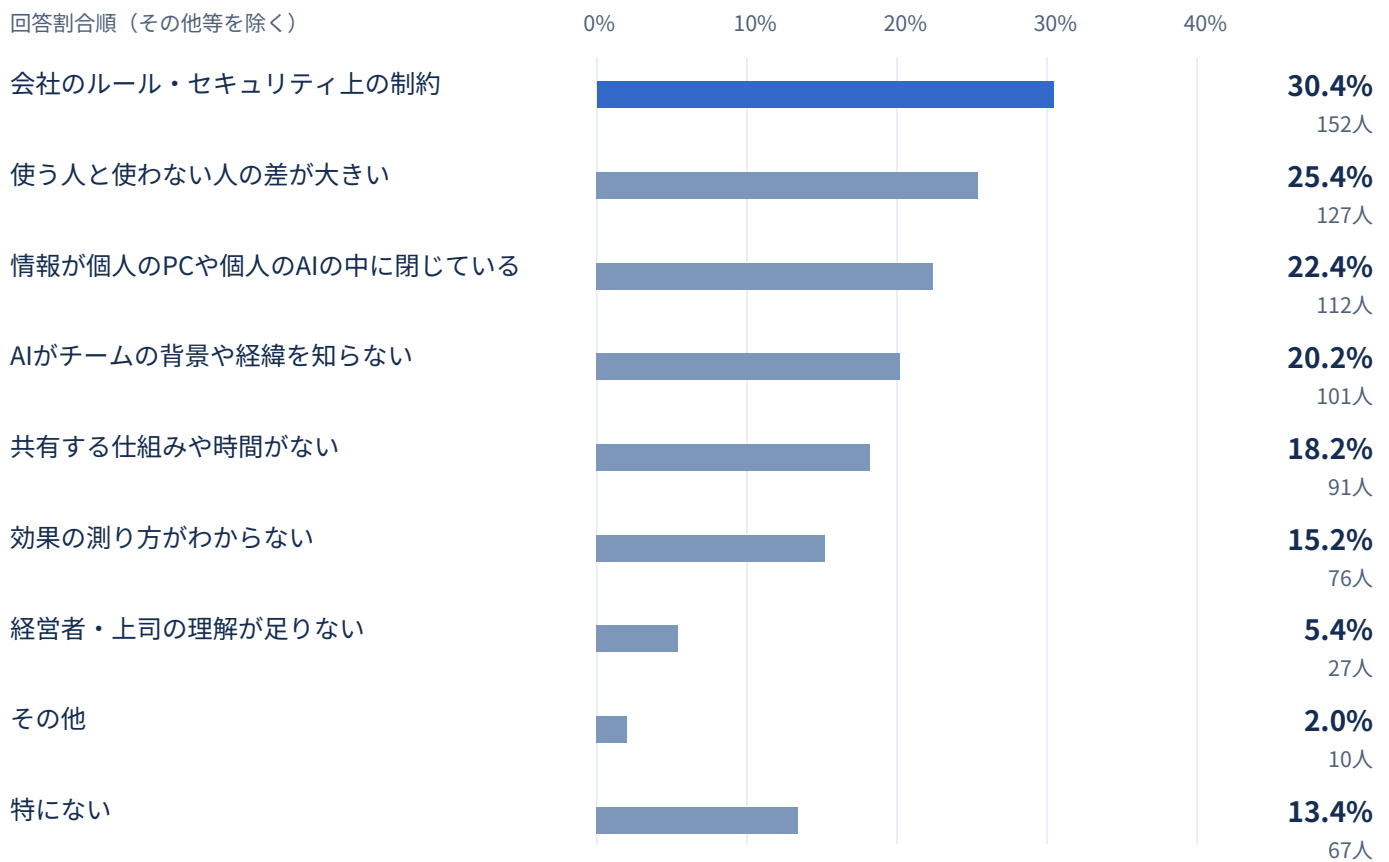
Q11 | n=500 | 単一回答。

第3章 | 活用の壁

チーム活用には、運用とルールが必要

最も多い壁はルール・セキュリティ上の制約30.4%。利用格差や情報の分断も挙がる。

Q12 チームとして生成AIを活かすうえで、壁になっていることをすべて教えてください。



考察 | 機能導入と、運用整備を一緒に進める

利用者の差、情報の所在、参照権限、成果の測り方は、ツールの導入だけでは決まらない。小さな業務で試す際にも、共有する情報と判断を担う人、利用範囲を具体的に定めることが重要になる。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

Q12 | n=500 | 複数回答（各項目の回答者割合）。

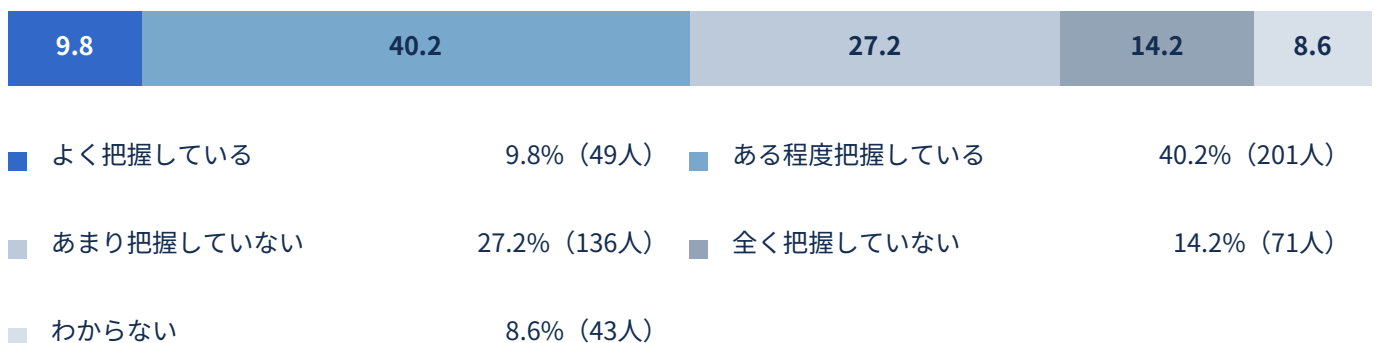
第3章 | 経営からの見え方

経営者は、AI活用を把握しているか

把握しているとの回答は50.0%。把握していないとの回答も41.4%ある。

Q14 あなたの会社の経営者（社長）は、社員が生成AIで何をどう使っているか、把握していると思いますか。

単位：%



実践提案 | 活用見える化する、3つの視点

どこで使うか

対象業務・利用者・利用情報

どう変わったか

所要時間・確認待ち・品質

何を見直すか

課題・改善担当・次の試行

考察 | 回答者が認識する経営者の把握状況を尋ねたものであり、経営者本人の回答だけを集計した結果ではない。上の3つの視点は実践提案である。

出典：TANKA Inc「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

Q14 | n=500 | 単一回答。

第3章 | 次に求める支援

個人作業とチーム連携への期待は同程度

「人と人の間の仕事」42.0%と「自分の作業」41.2%。「どちらとも言えない」は16.8%。

Q15 今後、AIに最も期待するのはどちらですか。

41.2%

個人の作業を速くする

資料作成・文章作成など／206人

42.0%

人と人の間の仕事を進める

確認・引き継ぎ・情報探しなど／210人

単位：%



■ 自分の作業をさらに速くすること	41.2% (206人)
■ 人と人の間の仕事を進めること	42.0% (210人)
■ どちらとも言えない	16.8% (84人)

考察 | 個人の支援を、仕事の接点にも広げる

両者の差は0.8ポイントであり、チーム支援への需要が大きく上回るとは言えない。一方、確認・引き継ぎ・情報探索への支援も、個人作業の速度向上と同程度に挙がっている。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

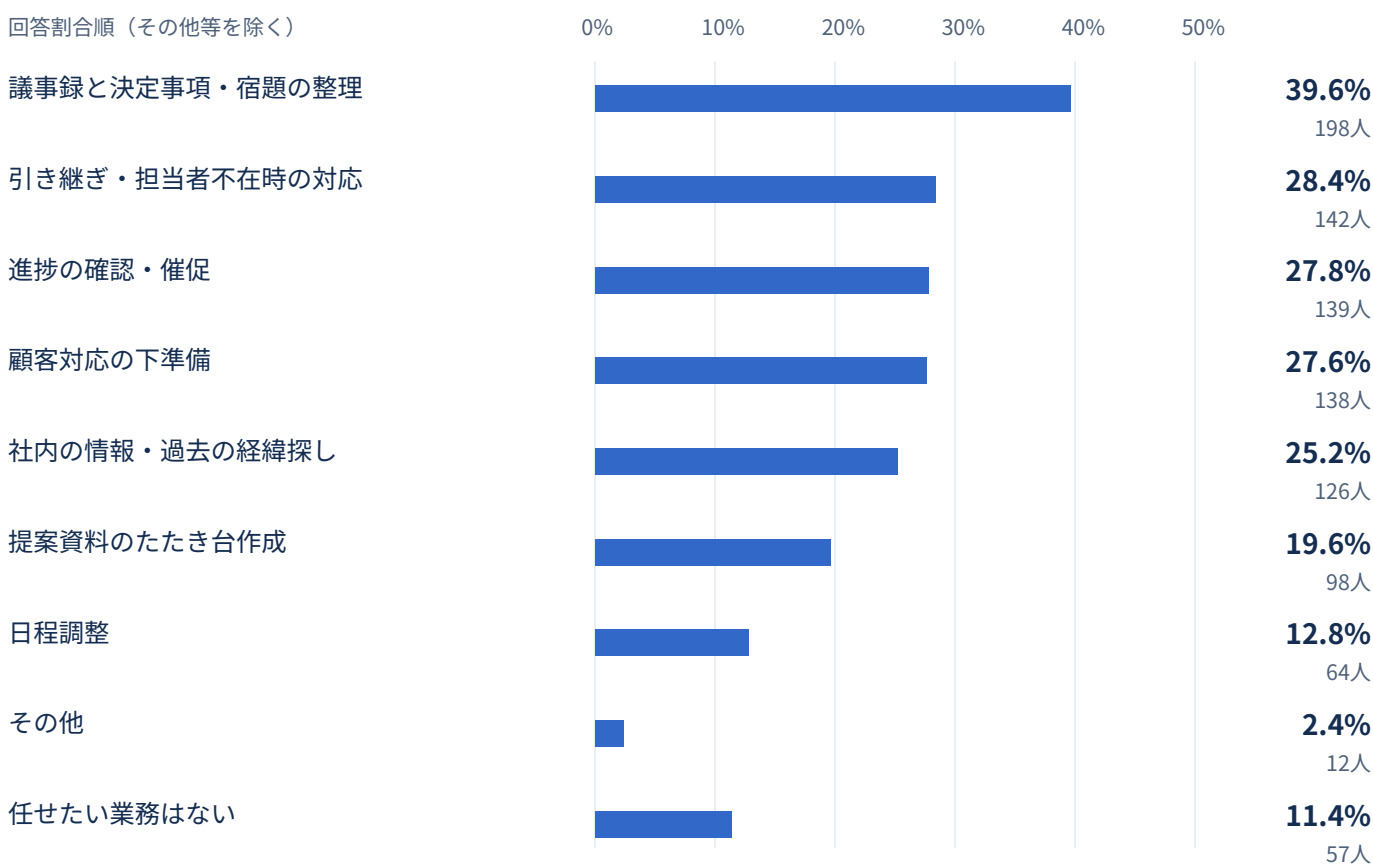
Q15 | n=500 | 単一回答。

第3章 | 任せたい業務

チームの文脈を理解するAIへの期待

最も多いのは「議事録と決定事項・宿題の整理」39.6%。業務の後続工程にも期待がある。

Q16 もしAIがチームの経緯や担当を理解したうえで仕事を進めてくれるなら、任せたい業務をすべて教えてください。



考察 | 会議の記録から、次の行動までを見渡す

議事録を作るだけでなく、決定事項、未決事項、担当、期限を整理し、仕事の継続に使える形にすることが検討対象となる。設問は仮定したAIの条件を示しており、現行製品への評価や実際の利用成果ではない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

Q16 | n=500 | 複数回答（各項目の回答者割合）。顧客対応の下準備には、経緯の整理・返信案を含む。

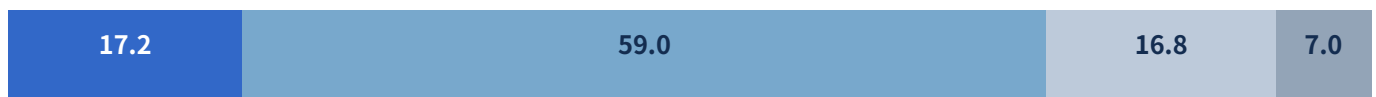
第3章 | 利用意向

利用意向の中心は、「条件が合えば」

「ぜひ使ってみたい」17.2%、「条件が合えば使ってみたい」59.0%。

Q17 チームの経緯や担当を理解して仕事を進めてくれるAIがあれば、あなたの会社で使ってみたいと思いますか。

単位：%



■ ぜひ使ってみたい	17.2% (86人)
■ 条件が合えば使ってみたい	59.0% (295人)
■ あまり使いたくないと思わない	16.8% (84人)
■ 使いたくないと思わない	7.0% (35人)

76.2%

積極的な意向86人＋条件付き295人
合計381人（500人中）

考察 | 「条件」の中身は、次の検証で確かめる

条件の詳細は本設問では尋ねていない。費用、信頼性、運用負荷、情報管理などを仮説として整理し、実際の検討者に確認したい。76.2%は購入意向やTANKAへの利用意向ではない。

出典：TANKA Inc 「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」
Q17 | n=500 | 単一回答。

第4章 | 調査から実践へ

個人の時短を、チームの流れにつなぐ

調査結果を踏まえたTANKA Incの提案。以下は実証済みの効果モデルではない。

01 背景を共有する

担当・経緯・決定事項を、必要な人が参照できる状態にする。

関連データ：共有の仕組み化24.0%（Q9）

02 仕事をつなぐ

情報の整理を、確認・担当・期限・次の行動へつなげる。

関連データ：停滞の原因として最多は確認・承認待ち28.2%（Q6）

03 成果を確かめる

作業の速さに加え、待ち時間や完了までの時間、品質を測る。

関連データ：効果の測り方が壁15.2%（Q12）

チームに向けたAIの価値は、参加する人数の多さだけで決まらない。共有された文脈に基づき、役割を分け、人の判断を保ちながら仕事を進められるかが、検証すべき焦点となる。

第4章 | 業務設計の例

会議から実行まで、つながりを設計する

実践イメージ：会議の内容を、担当者の次の行動に渡す。実際の製品画面や導入事例ではない。

01 記録

発言・資料から、決定と未決を分ける。

参照元を確認できるようにする



02 整理

宿題、担当候補、期限を一覧にする。

不明な担当・期限は推測で確定しない



03 確認

担当者が内容・担当・期限を確認する。

重要な判断と対外的な約束は人が承認



04 継続

変更・進捗を記録し、次の確認に使う。

最新情報と古い決定を区別する



記録する



合意する



進める

関連する期待：議事録・決定事項・宿題の整理39.6%、進捗確認・催促27.8%（Q16）。これらは別々の複数回答項目であり、同じ人が選んだ割合は分からない。

出典：TANKA Inc「中小企業における生成AIの業務活用に関する実態調査」

Q16 | n=500 | 複数回答（各項目の回答者割合）。

第4章 | 導入の進め方

小さな業務で、チームの変化を確かめる

4週間は試行計画の例。調査から算出した必要期間や、効果の保証ではない。

段階	実施内容	残すもの
第1週 対象を定める	引き継ぎや会議後の宿題など、担当間の接点がある業務を1つ選ぶ。	業務の範囲 責任者
第2週 現状を記録	所要時間、待ち時間、手戻り、利用情報を記録する。	導入前の基準 共有範囲
第3週 限定して試す	対象者を絞り、AIの整理結果を人が確認して仕事をつなぐ。	利用ログ 例外・修正
第4週 比較し見直す	同程度の案件を比較し、継続・変更・中止を判断する。	結果の評価 次の改善

試行で確かめる3点

- ① 同じ説明・情報探索の繰り返しが減ったか。
- ② 次に動く担当者が、必要な情報を受け取れたか。
- ③ 修正・確認のために追加でかかった時間を含めても、仕事が進んだか。

運用上のポイント | 比較する案件の難度や件数、繁忙度が違えば、時間の変化をAIだけの効果とは言えない。対象と測定方法を先に決め、結果を見てから指標を選ばない。

第4章 | 効果測定

「速く作れる」と「早く終わる」を測る

作業時間だけでなく、待ち時間・継続性・品質を組み合わせる。以下は測定指標の例。

見る対象	指標の例	読み取り方
個人の作業	作成・整理に要した時間	確認・修正の時間も含める
業務の接点	依頼から返答までの時間	人の待ち時間を別に測る
仕事の完了	開始から完了までの時間	同じ種類・難度の業務で比較
引き継ぎ	不足情報の照会回数	回数だけでなく内容も確認
品質	修正・手戻り・誤案内件数	速度の改善と同時に確認
情報の再利用	共有情報が後続業務で使われた割合	分母と対象期間を固定

記録例：一つの業務を、同じ定義で追う

案件ID／業務種別／開始・完了時刻／確認依頼・回答時刻／AI利用の有無／修正時間／担当者／差し戻し理由を記録する。実績がない段階で「生産性〇%向上」といった目標値を成果として表示しない。

第4章 | 選定の視点

チーム向けAIを評価する、5つの視点

機能名の比較から、実際の業務で確認できる問いへ。以下はTANKA Incの提案。

1

文脈

担当・案件の経緯・決定事項を参照できるか。古い情報や出所を区別できるか。

2

共有

AIとのやり取りや成果を、後続の担当者が必要な範囲で再利用できるか。

3

次の行動への接続

整理した内容が、担当・確認・期限・進捗につながるか。人が修正できるか。

4

権限と責任

見せる情報・実行できる操作を分けられるか。承認者と記録が明確か。

5

成果の検証

導入前後の時間・品質・負荷を、同じ定義で比較できるか。

選定時には実際の業務資料を使える範囲で試し、「できるはず」ではなく、参照元・出力・人の修正・次の行動まで確認する。情報管理や契約条件は自社の要件に照らして確認する。

TANKAの視点

Agents for Team

個人の能力を支えながら、チームで仕事を進めるためのAIへ。

一人の仕事を速く。
チームの仕事を、その先へ。

本調査では、個人の速度改善が広く実感される一方で、確認待ち、情報探索、共有、引き継ぎにも課題が見られた。次に問うべきは、個人の効率化で生まれた成果を、チームで使える文脈と行動へどうつなぐかである。

TANKAは「Agents for Team」を、本書で提案するチームAIの方向性として掲げる。背景を共有し、仕事をつなぎ、成果を確かめる。その価値は、実際の業務で検証していく必要がある。



本書の発行・調査委託

TANKA Inc

本頁は発行元の視点を示す。
製品機能・導入効果の検証結果ではない。

付記 | 集計定義と調査上の限界

数字を正しく使うために

調査から言えることと、今後の検証が必要なことを区別する。

合算と母数

割合は各設問の500人を母数とする。個人の改善64.2%、チームの改善51.8%、速度差の実感60.0%は異なる設問の結果。人数の重なりは本資料では分からない。

複数回答

Q5・Q10・Q12・Q16は複数回答。選択肢の割合を足して該当者数を算出しない。図表の文言は一部短縮している。

一般化・因果

回答者の主観的な評価を含む。無作為抽出や代表性の補正、回答者の勤務先の重複は確認できていない。日本の全企業への一般化や、AI導入による因果効果の推定は行っていない。

対象と集計時点

Freeasyの対象リスト「SMB_under100」を用いた500人の回答。調査期間は2026年10月16日～19日、集計基準日は10月19日。本書は従業員数・地域別の構成や、全ての中小企業に共通する傾向を示すものではない。

設問と意向

Q13は落差を示す設問文、Q16・Q17は仮定したAIの条件を示す設問。回答はその条件下の受け止め方・利用意向であり、特定製品の効果、購入意向、市場規模の証明ではない。

分析の範囲

本書は選択式設問の全体集計を対象とする。任意の自由記述（Q20）の引用・分類、および役職や業種と他設問とのクロス分析は含まない。

調査委託・発行：TANKA Inc./調査結果：Freeasyの500人集計をもとに編集。
表紙・人物・図解は説明用のイメージであり、実際の回答者や製品画面を示すものではない。
引用・権利・免責事項は次ページをご参照ください。

ご利用案内 | 引用・権利・免責事項

本書のご利用にあたって

本書を活用される際は、出典と調査の前提を併せてご確認ください。

出典表記例

TANKA Inc 「中小企業の生成AI活用実態白書 2026年版」
(Ver1.2、2026年10月22日制作)

01 引用・図表のご利用

当社が許諾権限を有する範囲で、本調査を扱う報道・記事への本文の抜粋・要約、図表の転載・再作図、本書紹介のための表紙掲載を無償・非独占的に認めます。出典・調査期間・n=500を明示し、数値と原意を保つ利用は事前申請不要です。詳細は添付の「報道関係者向け利用許諾のご案内」(Ver1.2)をご参照ください。本書全体の再配布や広告への転用等は別途ご相談ください。

02 著作権・商標等

本書の文章・図表・編集表現のうちTANKA Incが権利を有するものについて、当該権利は同社に帰属します。第三者の商標・素材等の権利は、各権利者に帰属します。調査の数値・事実そのものについて、独占的な著作権を主張するものではありません。

03 情報の性質・免責事項

本書は情報提供を目的とし、調査結果とTANKA Incの分析・提案を区別して掲載しています。内容は集計・制作時点の情報に基づき、特定の製品・サービスの性能、導入効果、将来の業績を保証するものではありません。事業上の判断・導入にあたっては、自社の業務条件に照らして必要な確認を行ってください。

発行・調査委託：TANKA Inc

許諾条件の範囲外のご利用・お問い合わせ：support@tanka.aiへご連絡ください。